

## 加藤清遺稿 蔵文和訳『因施設』(2)

福 田 琢(編・訳)

### 編者ノート

【1. 概要】本稿は「加藤清遺稿 蔵文和訳『因施設』(1)」(『同朋佛教』第43号、2007年)の続稿で、加藤清(かとう・せい、1907-1956)氏遺稿『施設論』ノートに基づく、チベット文「因施設」第2巻全文の現代語訳の試みである。

『因施設』はその第1巻冒頭で「三十二相をそなえる大人(mahāpuruṣa)がもし出家せず俗世にとどまれば転輪聖王になり、出家すればブッダとなる」という阿含を引用する(前稿参照)。管見によれば、現存する阿含資料のなかでこの『因施設』冒頭の教証に最も近いものは『中阿含経』巻11「王相応品第六」所収のNo. 58「七宝経」[T. No. 26, vol. 1, 493a-494b]である。そしてこの教証に準じて、まず三十二相の一々を解説し、次いで転輪聖王の七宝を論じる。第1巻は三十二相の解説が途中で終わっていた。この第2巻はその残余部分と、転輪聖王の七宝を取り上げる次のセクションの冒頭、いわゆる「輪宝」の解説までが費やされている。前稿同様、加藤氏遺稿の訳文(漢文書き下し風の文語体)を尊重しつつも、口語体の現代語訳として、できるだけ理解しやすく改めるよう試みた。

【2. 転輪聖王の七宝】『中阿含経』巻11「王相応品第六」所収No. 58「七宝経」[T. No. 26, vol. 1, 493a-494b]、およびその対応経であるパーリ相應部46-42.「転輪王経」(*Cakkavattisutta*) [*Samyuttanikāya*, P. T. S. ed. vol. V, p. 98]には、三十二相をもつ大人(mahāpuruṣa)は、もし出家せ

ず俗世にとどまれば七宝をそなえて転輪聖王となり、出家すれば七覚支を修してブッダとなると説かれている。この教証に導かれ、『因施設』は三十二相に続いて転輪聖王の七宝についても詳細に解説する。

転輪聖王およびその七宝を主題とする阿含資料には、先に挙げた「七宝経」「転輪王経」の他にも、『雑阿含経』巻 27, No. 721 経 [T. No. 99, vol. 2, 194a]、『増一阿含経』巻 33「等法品第三十九」No. 7 経 [T. No. 125, vol. 2, 731b] 等があり、七宝のひとつひとつが解説されている。これとはやや系統の異なる異本としては『仏説輪王七宝経』[T. No. 38, vol. 1, 821a-822b] がある。三十二相の場合、経典によって項目に若干の違いのあるものも認められるが、転輪王の七宝についてはそのような異同はない。上記の諸経典いずれにおいても輪宝 (cakraratna)・象宝 (hastiratna)・馬宝 (aśvaratna)・珠宝 (maṇiratna)・女宝 (strīratna)・居士宝 (gṛhapatiratna)・主兵臣宝 (pariṇāyaratna) の七つとされており、列挙される順序も、『仏説輪王七宝経』が少々異なっていることを除いて一致している。

そのほか、長阿含には「転輪聖王修行経」[T. No. 1 (6), vol. 1, 39a-42b] と題された比較的長い経典があり、また、いわゆる世記経類も、第三章を転輪王とその七宝の説明に割いている（『長阿含経』No. 30「世記経」転輪聖王品第三 [T. No. 1 (30), vol. 1, 119b-121b]；『大樓炭経』転輪王品第三 [T. No. 23, vol. 1, 281a-282b]；『起世経』転輪聖王品第三 [T. No. 24, vol. 1, 317a-320b]；『起世因本経』転輪王品第三 [T. No. 25, vol. 1, 372b-375c]）。それらの記述は世記経類の発展系と言える『世間施設』には取り上げられていなかった。さらに『遊行経』には、釈尊の入滅の地クシナガリーが、遠い過去においてはクシャーヴァティー (Kusāvati) と呼ばれる大いに繁栄した都で、大善見 (Mahāsudarśana) という名の転輪聖王の統治下にあったことが説かれている。この大善見王をめぐる描写のうちに、転輪王の七宝に関する定型的説明文を見ることができる（『長阿含経』No. 2「遊行経」第二

中 [T. No. 1 (2), vol. 1, 21c-22c])。ただし対応漢訳諸異本 (『佛般泥?經』卷下 [T. No. 5, vol. 1, 170a] ; 『般泥洹經』卷下 [T. No. 6, vol. 1, 185c] ; 『大般涅槃經』卷下 [T. No. 7, vol. 1, 202c]) およびサンスクリット本『涅槃經』[Wardschmidt ed. *Das Mahāpariṇirvāṇasūtra*, Teil 1-3, Akademie-Verlag Berlin 1950-1951, 臨川書店復刻, 1986 年. 34-18] では記述がかなり簡素である。またパーリ長部では、大善見王をめぐるエピソードは『大善見王經』という独立した經典として扱われており、そこに対応記述を見ることができる (*Mahāsudasshanasutta* [Dighanikāya, P. T. S. ed. vol. II, p. 172-174])。

【3. 目次の訂正について】前稿「藏文和訳『因施設』(1)」においては、教証『三十二相經』の引用文が比較的長かったため、これを第1章として独立させ、三十二相の各々を解説した注釈部分は第2章とした。しかしこれはやはり、教証と注釈とを一組にして、第1章としてまとめるべきであった。テキスト全体のシノプシスについて熟慮を欠いたまま、和訳の公表に踏み切ったために混乱を招いてしまったことをお詫びします。前回発表分を含め、『因施設』第1巻および第2巻の目次を以下のように改めたい。

## 目 次

### 第1巻 [Peking. Khu. 112a1]

#### 第1章 『三十二相經』

- 1-1. 教証『三十二相經』[112a2] / 1-1-1. 足下安平立相 [113a6] / 1-1-2. 足下二輪相 [113a7] / 1-1-3. 長指相 [113b1] / 1-1-4. 足跟広平相 [113b1] / 1-1-5. 手足指縵網相 [113b2] / 1-1-6. 手足柔軟相 [113b3] / 1-1-7. 足趺高滿相 [113b4] / 1-1-8. 伊泥延膊相 [113b5] / 1-1-9. 正立手摩膝相 [113b6] / 1-1-10. 陰藏相 [113b7] / 1-1-11. 身広長等相 [113b8] / 1-1-12. 毛上向相・一一孔一毛相 [114a1] / 1-1-13. 金色相 [114a3] / 1-1-14. 丈光相 [114a4] / 1-1-15. 皮膚細軟相 [114a5] / 1-1-16. 七処隆滿相 [114a6] / 1-1-17. 兩腋下隆滿相 [114a7] / 1-1-18. 上身如獅子相 [114a7] / 1-1-19. 大直身相 [114a8] / 1-

1-20. 肩円満相 [114b1] / 1-1-21. 四十齒相 [114b1] / 1-1-22. 齒齊相 [114b2] / 1-1-23. 齒無隙相 [114b3] / 1-1-24. 牙白相 [114b4] / 1-1-25. 獅子頰相 [114b4] / 1-1-26. 味中得上味相 [114b5] / 1-1-27. 大舌相 [114b5] / 1-1-28. 梵声相 [114b6] / 1-1-29. 真青眼相 [114b7] / 1-1-30. 牛眼睫相 [114b8] / 1-1-31. 頂髻相 [115a1] / 1-1-32. 白毫相 [115a2] (教証終わり) / 1-2. 足下安平立相 [116a5] / 1-3. 足下二輪相 [117b4] / 1-4. 長指相・足跟広平相・大直身相 [118b] / 1-5. 手足指縵網相 [119b3] / 1-6. 手足柔軟相 [120a7] / 1-7. 足趺高滿相・毛上向相 [121a2] / 1-8. 伊泥延膊相 [121b4] / 1-9. 身広長等相・正立手摩膝相 [122a8] / 1-10. 陰藏相 [123a8] / 1-11. 一一孔一毛相・皮膚細軟相 [124a4] / 1-12. 金色相・丈光相 [125a3] (以上、前稿掲載分)

第2巻 [Peking. Khu. 126a8]

第1章 三十二相 (承前) [126a8]

1-13. 足下安平立相 [126a8] / 1-14. 上身如獅子相・両腋下隆滿相・肩円満相 [127a5] / 1-15. 四十齒相・齒齊相・齒無隙相 [128a2] / 1-16. 齒白相 [128b7] / 1-17. 獅子頰相 [129a8] / 1-18. 味中得上味相 [130a3] / 1-19. 大舌相・頂髻相 [130b6] / 1-20. 梵声相 [131b2] / 1-21. 真青眼相・牛眼睫相 [132b1] / 1-22. 白毫相 [133a8]

第2章 転輪王とその七宝 [134b5]

3-1. 教証 転輪王経 [134b5] / 3-2. 輪宝 [135a4] / 3-2-1. 金の輪宝 [137a6] / 3-2-2. 銀の輪宝 [138b2] / 3-2-3. 銅の輪宝 [139b5] / 3-2-4. 鉄の輪宝 [140b6] / 3-2-5. 輪宝のまとめ [141b7]

チベット文和訳『因施設』  
(加藤清遺稿ノートに基づく現代語訳)  
第2巻

[Peking. Khu. 126a8] 『因施設』第2巻。

第1章 三十二相の意義(承前)

1-13. 七処隆満相

[126a8] なにゆえに、菩薩にして大人なるものは、身体の七箇所が隆起しているのか。

[126b1] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前の如し。〔彼は〕沙門・婆羅門・貧者・窮迫者と希求者(yācanaka)に高〔価な布〕施、すなわち段食(anna)と飲物(pāna)と飲食(bhojya)と吸食(bhojana)と衣服と香と華鬘と塗香と臥具と坐具と住処と灯火を施与する。偉大な心相続をもち、清浄を保ち、有情に対してなすべきことをなす。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「身体の七箇所が隆起している」という大人の相を得る。

[126b5] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……彼の小城と、大城と、諸の故郷と、蔵と、穀庫とを興隆(utsada)し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前のごとくに〕詳説される。

[126b6] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい……乃至……出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覚者となり、名声はあまね

く響きわたる、云々までは前の如し。その意味での出離と、阿蘭若より生ずる諸の善法 (kuśaladharmā) と静慮 (dhyāna) と解脱 (vimokṣa) と三昧 (samādhi) と定 (samāpatti) と作意 (manasikāra) とを興隆し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……と、以下〔前のごとくに〕詳説される。以上がその特相である。

[127a2] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「〔世尊の身体は〕 齢六十に達した象の如く、先〔に言ったとおり〕 七箇所が隆起している。即ち〔両〕手・〔両〕足・〔両〕肩・頸の諸相が生起する。これは前生において布施を修して、諸沙門と婆羅門とに〔衣を〕着せ、多くの飲料と食物とを布施し、指導者と希求者と窮迫者に、食と飲料と衣服と香と華鬘と塗香と焼香と香袋と音楽と灯火と住处と臥具とを施与し、〔その〕善業ゆえに安穩に生ずる、〔という〕このことを他生（他の諸々の迷える生存）たちに教示している。その業の異熟によって、かの世尊の〔身体の〕七箇所は隆起しているのである」

#### 1-14. 上身如獅子相・両腋下隆満相・肩円満相

[127a5] なにゆえに菩薩は「上半身が獅子の如くである」「両腋が充満している」「肩先が豊満である」という三つの大人相を得ているのか。

[127a6] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至……困窮すれども執ることなく、度を越して執ることなく、罪を思惟しながらも善処し、誠実さをもって成すべきことを成し、黙して語らず、更にまた、菩薩は善巧 (kuśala) なる比丘、婆羅門のそれぞれに説くべき種々の法門 (paryāya) を教え、認めるべきものは追認する。さらにまた、菩薩は王あるいは大臣として〔国に〕安楽をもたらし、善行の主となって〔他の〕主〔たち〕を教導する。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把

持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生じ、……乃至、広説する。これをもって、この菩薩は「上半身が獅子の如くである」「両腋が充満している」「肩先が豊満である」という三つ〔の相〕を得る。

[127b3] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……安樂をもたらし、善行の主となって〔他の〕主〔たち〕を教導し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……と、以下〔前の如くに〕詳説される。

[127b5] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい……乃至……出家するならば、この世間における如來・阿羅漢・正等覺者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前のごとし。安樂をもたらし、善行の主となって〔他の〕主〔たち〕を教導し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[127b6] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔經中に〕以下の如く述べられているのである「森の洞穴の獅子王のごとく、かの〔世尊の〕上半身は獅子に似て、先〔に言ったとおり〕両腋がたいへん充満しており、肩先もたいへん豊満である。困窮しても奪うことなく、度を越して奪うことなく、罪を思惟しながらも善処し、誠実さをもって成すべきことを成し、諸沙門と婆羅門とを許容し、それによって許容すべき諸法を許容し、安樂をもたらし、善の主となり、それぞれまた主人に命じ、〔その〕善業ゆえに安穩に生ずる、〔という〕このことを他生（他の諸々の迷える生存）たちに教示している。その業の異熟によって、師の身にはこれら三つの相が生じているのである」

1-15. 四十齒相・齒齊相・齒無隙相

[128a2] なにゆえに、菩薩は「齒が四十本ある」「齒が整然としている」

「齒根が密着している」という三つの大人相を得ているのか。

[128a3] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前の如し。反目（離間）を断じ、反目をとどめ、一方の言い分を聞いても、そちら側と仲違いさせるためにあちら側に〔それを〕語ることなく、あちら側の言い分を聞いても、あちら側と仲違いさせるために〔こちらに〕やって来て語ることなく、そのように、相反するものを一つに集約し、〔互いに〕敬うことを慶びとし、和合を歎びとし、和合を楽しみとし、和合する言葉を語る。さらにまた、菩薩は諸々の相反するもの、あらゆる相反するもの、すべての相反するもの、諸々の不和なるものを和合せ、一致させ、如実に歎喜してそれらの一致と敬いを顕らかに歎喜し、それらを苦とせず、まったく疲労をおぼえない。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「齒が四十本ある」「齒が整然としている」「齒根が密着している」という三つの大人相を得る。

[128b1] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、轉輪王となって四方を制し……乃至……反目せざる眷属を擁し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前のごとくに〕詳説される。

一五七

[128b2] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい……乃至……出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覺者となり、名声はあまなく響きわたる、云々までは前のごとし。……反目せざる眷属を擁し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……と、以下〔前の如くに〕詳説



される。以上がその特相である。

[128b4] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「歯が四十本あり、歯が整然としており、〔歯〕根が密着している。もし反目の言葉と反目の行いを普く遠離し、以前の異熟たるにふさわしく行い、その全身にて慶び、歓喜し、満足して、〔その〕善業ゆえに安穩に生ずる、〔という〕このことを他生（他の諸々の迷える生存）たちに教示している。その業の異熟によって、師の身にはこれら三つの相が生じているのである」

#### 1-16. 齒白相

[128b7] なにゆえに菩薩は「歯が純白である」という大人相を得ているのか。

[128b7] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前の如し。欲界の慈悲（maitri）を得て、あらゆる衆生に対する慈しみの心に満ち、さらにまた菩薩は、考察し、心の自性を転ずる。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「歯が純白である」という大人の相を得る。

[129a3] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……反目せざる眷属を擁し、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。

[129a4] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覺者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前の如し。……菩薩は歯

が純白である、というそのことによって、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし、尊敬し……と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[129a6] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「以前に、齒が純白である、という相を得た、そのことを聴くべきである。欲界の慈悲を得て、考察し、信の自性を転じ、それゆえ善業をもって安穩を生みだす、〔という〕このことを他生に教示する、その業の異熟によって、世尊の齒が純白であることが生じるのである」

#### 1-17. 獅子頬相

[129a8] なにゆえに菩薩は「頬が獅子の如くである」という大人相を得ているのか。

[129a8] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前の如し。心にこのような決意をもって「私に対して、たとえどのような者であっても、乞い求めるならば、私は持っている限りをその者に施与し、与えないうちは返すまい」と思惟する。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「頬が獅子の如くである」という大人相を得る。

[129b4] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……いかなるものを欲し、いかなるものを思惟し、いかなるものを成就しようとする場合も、その一切を完全に達成して〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前のごとくに〕詳説される。

[129b6] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覺者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前の如し。……彼はいかなるものを欲し、いかなるものを思惟し、いかなるものを成就しようとする場合も、その一切を完全に達成して〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[129b8] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔經中に〕以下の如く述べられているのである「以前の他生（過去世爾來の、他の諸々の迷える生存）のために、師の心にこの如き願いがあるゝたとえどのような者であっても、私に対して請い求めることがあれば、私は持っている限りをその者に施与し、与えないうちは返すまい」と。その如く、諸々の厳正な実践をもって、それが完全に満たされた様子を思惟して、以前の他生（他の諸々の迷える生存）たちのために受持する。その業の異熟によって、大仙、勝者〔なる世尊〕の類は獅子の如くである」

#### 1-18. 味中得上味相

[130a3] なにゆえに菩薩は「最も勝れた味を味わう」という大人相を得ているのか。

[130a3] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前の如し。敵意をもたないことを本性としてもつものとなり、菩薩は、有情の誰に対しても、手や土塊や鞭や刃物、あるいは破壊をもたらすいかなるものをもっても敵意をあらわさない。さらにまた、菩薩は父母・近親・長老・師というような者たちや、さらにまた沙門・婆羅門に、危害を加えず、危害を加えることを喜ばず、かれらに相應しい薬と、効用ある食事と、適切な奉仕を与える。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……

かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。  
これをもって、この菩薩は「最も勝れた味を味わう」という大人相を得るのである。

[130a8] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……危害少なく無病なる性質をもち、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前のごとくに〕詳説される。

[130b1] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覚者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前の如し。……危害少なく無病なる性質をもち、〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[130b4] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「その身に諸々の味の中でも最勝の味を得ているのは、以前に輪廻したとき、手やあるいは鞭やあるいは武器をもって、有情の誰に対しても危害を加えず、父母・沙門・婆羅門たちに、かつて病の治療薬などを与え、善業によって安穩が生ずることを、他生に教示する。その業の異熟によって、世尊は諸々の味のなかで最も勝れた味を味わうのである」

#### 1-19. 大舌相・頂髻相

[130b6] なにゆえに菩薩は「舌が長く薄い」「頭に肉髻をもつ」という二つの大人相を得ているのか。

[130b7] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前のごとし。自ら殺生を遠離し、殺生を斥け、また他の者を殺生から遠離せようと正しく教導し、自らもまた不与取と欲邪行と妄語と穀酒と酒精と

に耽溺する放逸処を遠離し、……正しく教導する。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「舌が長く薄い」「頭に肉髻をもつ」という大人相を得る。

[131a3] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……舌が長く薄く、頭に肉髻をもつことをもって〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。

[131a5] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覚者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前の如し。……舌が長く薄く、頭に肉髻をもつことをもって〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[131a7] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「勝者（ブッダ）が頭に肉髻をもち、舌が長く薄くなっているのは、〔みずから〕生命あるものを殺さず、与えられざるものを奪わず、淫欲の邪行をおこなわず、妄語を言わず、飲酒も常に遠離して、諸々の他の大勢のものたちをも同様にさせることで、〔その〕善業によって安穩が生ずることを他生に教示する。その業の異熟によって、勝者（ブッダ）の舌は長く薄く、また頭に肉髻をもつのである。

## 1-20. 梵声相

[131b2] なにゆえに菩薩は「梵声を発する」という大人相を得ているのか。

[131b2] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前のご

とし。粗語を遠離し、粗語を斥け、寂靜を断つ粗語と、他人には耐え難い〔粗語〕と、他の〔粗〕語とを消尽し、人々の思いを楽しませない〔語〕、人々に喜ばれない〔語〕、人々の思いを満たさない〔語〕、平等でない〔語〕、平静でない〔語〕、このような諸々の語を遠離し、愛すべき語、耳を悦ばせる〔語〕、思いを満たす〔語〕、歡喜をなす〔語〕、高貴な〔語〕、響きの善い〔語〕、明瞭な〔語〕、解脱の〔語〕、平等な〔語〕、偏りのない〔語〕、不相応なことのない〔語〕、人々の樂欲なる〔語〕、人々の思いにかなう〔語〕、人々を喜ばせる〔語〕、人々の思いを満たす〔語〕、平等な〔語〕、平静な〔語〕、子のような諸々の語を語る。さらにまた、菩薩は、無意味な語を遠離し、無意味な語を斥け、適時に語り、眞実（諦）を語り、意義あることを語り、吟味して語り、道理にかなう〔語〕、論議された〔語〕、明らかな〔語〕、平静な〔語〕、普遍性（法）をもつ〔語〕、有意義な〔語〕、混濁のない〔語〕を語る。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「梵声を発する」という大人相を得る。

cf. 『大毘婆沙論』卷 118 [T. No. 1545, vol. 27, 605c10-12] 「故如『施設論』說「何緣菩薩、感得梵音大士夫相？菩薩昔餘生中、離龜惡語、此業究竟、得梵音聲、」；*Abhidharmakośabhāṣya* [Pradhan 1st. ed p. 25. 19-20] 「yat tarhi *Prajñaptiśāstra* uktaṃ "pāruṣyavirateḥ subhāvitatvād brahmas varatā mahāpuruṣalakṣaṇaṃ nirvartata" iti/」（『施設論』に「粗語からの遠離をよく修することによって梵声という大人相が得られる、と説かれているが……）；玄奘訳『俱舍論』卷 2 [T. No. 1558, vol. 29, 9b6-7]；『順正理論』卷 5 [T. No. 1562, vol. 29, 358b13-14]

[132a3] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するなら

ば、転輪王となって四方を制し……乃至…… 梵声を発することをもって〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。

[132a4] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覚者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前の如し。……梵声を発することをもって〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[132a7] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「梵音にして、太鼓の響きの特徴をそなえているのは、平静にして柔軟に語り、粗語をあまねく遠離し、喜びを語り、語るべきでないことは語らず、無意味な言葉を遠離し、時機に適切な意味と法とを語り、〔その〕善業によって安穩が生ずることを他生に教示する。その業の異熟によって、善逝、大仙（ブッダ）は梵鐘を発するのである。

#### 1-21. 真青眼相・牛眼睫相

[132b1] なにゆえに菩薩は「目が紺碧の如くである」「雄牛の睫毛の如くである」という大人相を得ているのか。

[132b2] いわく、菩薩であり、以前の生存……乃至、広説すること前の如し。欲〔界〕繋の慈悲を得て、菩薩は、意義（*artha*）あることを欲する者と、意義ないことを欲する者と、利益を欲する者と、損害を欲する者と、快楽を欲する者と、不快を欲する者と、快い接触（*sukhasam-sparśa*）を欲する者と、快い接触を欲さない者と、安寧（*yogakṣema*）を欲する者と、安寧を欲さない者という、それらあらゆる有情を、慈悲の眼をもって見る。譬えば、母親が一人息子を愛で、助力し、歓喜し、

満足し、凝視し、不適切なことなく、八ヶ月もしくは九ヶ月に達したところで離れて見つめるとき、慈悲の眼をもって見るごとく、菩薩はまた、意義あることを欲する者と、……広説乃至……成就と安穩を欲さない者という、それらあらゆる有情を、慈悲の眼をもって見る。菩薩はその業と、正しい受持と、正しい把持ゆえに、身壞して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。……広説乃至……かれはそこより死して後、この世界において諸々の人と同分に生ずる。これをもって、この菩薩は「目が紺碧の如くである」「雄牛の睫毛の如くである」という大人相を得る。

[133a1] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し……乃至……目が紺碧の如くであり、雄牛の睫毛の如くであることをもって〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。

[133a3] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覺者となり、名声はあまねく響きわたる、云々までは前の如し。……目が紺碧の如くであり、雄牛の睫毛の如くであることをもって〔人々はかれを〕恭敬し、礼を尽くし……云々と、以下〔前の如くに〕詳説される。以上がその特相である。

[133a6] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「善逝の御眼は紺碧であり、師は雄牛の睫毛の如きをもち、利益を欲する者、利益なきことを欲する者、快い接触を欲さない者、損害を欲する者を、まさに母が子を慈しむがごとくに、牟尼は一切世間を見渡し、〔その〕善業によって安穩が生ずることを他生に教示する。その業の異熟によって、師の身体には（「目が紺碧の如くである」「雄牛の睫毛の如くである」という）二種の相が生起するのである」



1-22. 白毫相

[133a8] なにゆえに菩薩は「眉間に〔白〕毫が生ずる」という大人相を得ているのか。

[133a8] いわく、菩薩であり、以前の生存・以前の住処・以前の身・以前の自体の得と他の前生等とを聚集し、尽し、滅し、遠離し、変壊し、全尽すること等において、父母・近親・長老・師というような者たちや、さらにまた沙門・婆羅門に、危害を加えず、危害を加えることを喜ばず、時に応じて諦を説く者は、その業と、正しい受持と、正しい把持とによりて、身壊して後、諸々の兜率天の同分に生ずる。

[133b4] かれはそこに生まれて後、久しからずして、兜率種に以前生じた諸天たち〔と同様〕の天の三事を生起する。三事とは何かといえば、すなわち、天の寿命・天の容色・天の名声を生起するのである。かれはそこにおいて寿命のある限り住し、それより没して、この世界において諸々の人と同分に生じ、かれはこ〔の世界〕において、王宮、もしくは宰相の家に生まれる。これをもって、この菩薩は「眉間に〔白〕毫が生ずる」という大人の相を得る。

[133b6] その特相は以下の如くである。もし家に止まり、家に住するならば、転輪王となって四方を制し、法をそなえた法王となり、七宝をもつ者となる。その七宝とは以下の如くである。すなわち、輪宝と象宝と馬宝と珠宝と女宝と居士宝と、第七に將軍宝とである。その子は千人あり、勇健・勇猛にして勝れた容色をそなえ、他軍を征服し、滅ぼし尽くす。かれは大海に至るまでの大地を、余すところなく、障碍なきものとし、災患なきものとする。刑罰を設けず、兵刃を用いず、法に相應し、平等をもってよく統治し、とどまる。世間に転輪王の出現するとき、その名声は多くの民衆を歓喜させ、満足させる。またその名声は他化自在の諸天にいたるまでの名声となり、宮中の女たち・太子・大臣・首長・兵士・

村民・諸国民は〔王を〕恭敬し、礼を尽くし、尊敬し、敬う。

[134a5] もし髪と髭を剃除し、袈裟などをまとい、信をもって家より家なき状態に出家するならば、この世間における如来・阿羅漢・正等覺者となり、名声はあまねく響きわたるという。世間に如来・阿羅漢・正等覺者の出現するとき、その名声は多くの民衆を歡喜させ、満足させる。またその名声は色究竟〔天〕にいたるまでの名声となり、諸々の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・阿修羅・迦樓羅・乾闥婆・緊那羅・摩羅伽・夜叉・羅刹・人・非人は〔かれを〕恭敬し、礼を尽くし、尊敬し、敬う。以上がその特相である。

[134b2] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔經中に〕以下の如く述べられているのである「このように、容貌は金色に等しく、眉間に〔白〕毫を生じ、清浄にして純白、秀麗にして美妙、端正で、卷貝の色に等しく、皆が稱讃に値するものとして稱讃し、時機に適切な法を語り、〔その〕善業によって安穩が生ずることを他生に教示する。その業の異熟によって、眉間に白毫を生ずるのである」

[134b4] 阿毘達磨施設論 (*Abhidharmaprajñaptiśāstra*) 因施設 (*Kāraṇaprajñapti*) 中、相蘊 (*lakṣaṇaskandha*) といわれる第一蘊は完結した。

### 第3章 轉輪王とその七宝

#### 3-1. 教証 轉輪王經

cf. 『中阿含經』卷11「王相應品第六」所収 No. 58「七宝經」[*T. No. 26, vol. 1, 493a-494b*]; *Cakkavattisutta* [*Samyuttanikāya* 46-42, P. T. S. ed. vol. V, p. 98]

[134b5] 舍衛城にゆかりあり。

[134b5] 比丘たちよ、轉輪王の世間に出現したまうとき、七宝の世間に

現することあり。七宝とはいずれか。すなわち、輪宝と象宝と馬宝と珠寶と女宝と居士宝と、第七に將軍宝とである。比丘たちよ、この如く轉輪王の世間に出現したまうとき、この如く七宝の世間に出現することあり。

[134b8] 比丘たちよ、それと同様に、如来・応供・等正覚者の世間に出現したまうとき、七覺支宝の世間に出現することあり。七とはいずれか。すなわち、念覺支宝と摂法〔覺支宝〕と精進〔覺支宝〕と喜〔覺支宝〕と輕安〔覺支宝〕と定〔覺支宝〕と第七に捨覺支宝となり。比丘らよ、この如く、如来・応供・等正覚者の世間に出現したまうとき、この如く七覺支宝の世間に出現することあり — と、このように説かれた。

### 3-2. 輪宝

cf. 『雜阿含經』卷 27, No. 721 經 [T. No. 99, vol. 2, 194a] 『增一阿含經』卷 33 「等法品第三十九」 No. 7 經 [T. No. 125, vol. 2, 731b]; 『長阿含經』No. 30 「世記經」轉輪聖王品第三 [T. No. 1 (30), vol. 1, 119b-121b] (『大樓炭經』轉輪王品第三 [T. No. 23, vol. 1, 281a-282b]; 『起世經』轉輪聖王品第三 [T. No. 24, vol. 1, 317a-320b]; 『起世因本經』轉輪王品第三 [T. No. 25, vol. 1, 372b-375c]); 『長阿含經』No. 2 「遊行經」第二中 [T. No. 1 (2), vol. 1, 21c-22c]; *Mahāsudasshanasutta* [*Dighanikāya*, P. T. S. ed. vol. II, p. 172-174]

[135a4] なにゆえに轉輪王は輪宝を獲ているというのか。

[135a4] いわく、轉輪王であり、以前の生存……乃至、広説すること前のごとし。自ら殺生を遠離し、殺生を斥け、鞭を遠離し、鋭器を遠離し、慚愧と慈悲をもち、生命を有するもの、一切衆生より極細の虫にいたるまでの殺生より心を清浄にし、また他のものを殺生から遠離させようと正しく教導し、自らもまた不与取と欲邪行と妄語と兩舌と粗語と綺語と

貪欲と瞋恚と邪見とを遠離して正見をもち、また他のものを正見に正しく教導し、布薩時である十五日に沐浴し、斎戒 (poṣadha) を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂 (nābhi) を伴い、車幅網 (nemi) を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を黄金をもって合成したものである。

[135b2] クシャトリヤの灌頂王 (mūrdhābhiṣiktarāja) はそれを見て、このように思惟する「私が、昔の諸々の転輪〔王〕の話として聞いているところでは、クシャトリヤの灌頂王が、布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を黄金をもって合成したものであり、彼は転輪王になる、というが、〔それに〕相応しているから、私が転輪王になることも確かであろう」と。

[135b6] そして転輪王は座より立ち、上衣を一方の肩にかけ、右膝の膝蓋骨を地に着け、天の輪宝を、両手で取り、左手に置き、右手を東方に向け、推して言う「輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし、ああ輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし」と。「全勝すべし」と言われ、天の輪宝はいにしえの転輪の道を行く。すると転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[136a2] 東方の藩王 (māṇḍalikarāja) の、いる限りの一切の者たちは、転輪王の元にやって来て、近づき、このように言う「王よ、善く来られた。王が来られたことは善きことです。この国土は王のものであり、富み、豊かで、安穩で、豊穰で、多くの民衆を満たしております。ゆえに願わくば、これら〔諸国〕を王は善く統治されますように。我々は王の従者

たらんと望んでおります」

[136a4] 転輪王はまた彼らに命じて言う「藩主たち、かくの如くあれ。私自身の国土と同様、法にかなう統治を行い、非法を行うことなかれ。この国土において非法を行い、背反する者には居住を許さない。かくの如くなせば、御身らは我が従者である」と。

[136a6] こうして天の輪宝は東方を統治し、東方の大海より徒歩にて南方に向かい、古聖の転輪の道に沿って行き、その転輪の道を輪宝が行く。すると転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[136b1] 南方の藩王の、いる限りの一切の者たちは、転輪王の元にやって来て……乃至、広説すること前のごとし。こうして天の輪宝は南方を統治し、南方の大海より徒歩にて西方に向かい、古聖の転輪の道に沿って行き、その転輪の道を輪宝が行く。すると転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[136b5] 西方の藩王の、いる限りの一切の者たちは、転輪王の元にやって来て……乃至、広説すること前のごとし。こうして天の輪宝は西方を統治し、西方の大海より徒歩にて北方に向かい、古聖の転輪の道に沿って行き、その転輪の道を輪宝が行く。すると転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[137a1] 北方の藩王の、いる限りの一切の者たちは、転輪王の元にやって来て……乃至、広説すること前のごとし。こうして天の輪宝は北方を統治し、北方の大海より徒歩にて王宮に帰還し、重ねた座の上に、車軸を置いたかの如くにとどまる。

[137a3] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「殺生を遠離し、不与取を遠離し、邪淫を遠離し、真理（satya）を語って両舌をなさず、粗語を語らず、不適切な時には普く語らず、諸々の宝に対する貪りの心なく、邪見を遠離し、正見を行じ、十白業道を以前より正しく堅持し、それらによって、千輻の轂を伴い、車幅網を伴う輪を王は獲るのである」

### 3-2-1. 金の輪宝

[137a6] さらにまた、転輪王に四種ある。すなわち、金の輪宝を生起する転輪王、銀の輪〔宝〕を生起する転輪王、銅の輪〔宝〕を生起する転輪王、鉄の輪宝を生起する転輪王である。

cf. *Abhidharmakośabhāṣya* [Pradhan 1st. ed p. 184. 10-11] 「yasyāyasaṃ cakram sa ekadvīpādhipatiḥ/ yasyatāmramayaṃ sa dvayoḥ/ yasya rūpyamayaṃ sa trayāṇām/ yasya suvarṇamayaṃ sa caturdvīpādhipatiḥ/ eṣa Prajñaptiko nirdeśaḥ/」（鉄の輪をもつ者は一州の主、銅〔輪〕を持つ者は二〔州〕の、銀〔輪〕をもつ者は三〔州〕の、金〔輪〕を有する者は四州の主である〔という〕これは『施設論』の説である）；玄奘訳『俱舍論』卷2 [T. No. 1558, vol. 29, 64b28-c3]；『順正理論』卷32 [T. No. 1562, vol. 29, 524b23-27]

[137a8] その中、転輪王のうち、金の輪宝を生起する転輪王であり、以前の生存……広説乃至……自ら清浄なる十善業道を正しく堅持し続け、他人らに対してもまた、十善業道を正しく堅持せしめる。王が布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千輻の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を黄金をもって合成したものである。

[137b3] クシャトリヤの灌頂王はそれを見て、このように思惟する「私が、昔の諸々の転輪〔王〕の話として聞いているところでは、クシャトリヤの灌頂王が、布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは穀を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を黄金をもって合成したものであり、彼は転輪王になる、というが、〔それに〕相応しているから、私が転輪王になることも確かであろう」と。

[137b7] そして転輪王は座より立ち、上衣を一方の肩にかけ、右膝の膝蓋骨を地に着け、天の輪宝を、両手で取り、左手に置き、右手を東方に向け、推して言う「輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし、ああ輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし」と。「全勝すべし」と言われ、天の輪宝はいにしへの転輪の道を行く。転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[138a2] 東方の藩王たちはまた、転輪王がやって来たことを聞き、聞きおわるとさらに貢ぎ物を運んで転輪王の元にやって来て、近づき、このように言う「王よ、善く来られた。王が来られたことは善きことです。この国土は王のものであり、富み、豊かで、安穩で、豊穡で、多くの民衆を満たしております。ゆえに願わくば、これら〔諸国〕を王は善く統治されますように。我々は王の従者たらんと望んでおります」

[138a7] 転輪王はまた彼らに命じて言う「藩主たち、かくの如くあれ。私自身の国土と同様、法にかなう統治を行い、非法を行うことなかれ。この国土において非法を行い、背反する者には居住を許さない。かくの如くなせば、御身らは我が従者である」と。

[138b1] こうして天の輪宝は東方をよく平定し、東方の大海を渉って南方

と西方と北方に行って平定して王宮に帰還し、重ねた座の上に、車軸を置いたかの如くにとどまる。

### 3-2-2. 銀の輪宝

[138b2] その中、転輪王のうち、銀の輪宝を生起する転輪王であり、以前の生存……広説乃至……自らもまた、十善業道を正しく堅持し続け、他人らに対してもまた、十善業道を正しく堅持せしめる。それもまた前〔に説いた〕と同様であり、王が布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を銀をもって合成したものである。

[138b6] クシャトリヤの灌頂王はそれを見て、このように思惟する「私が、昔の諸々の転輪〔王〕の話として聞いているところでは、クシャトリヤの灌頂王が、布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を銀をもって合成したものであり、彼は転輪王になる、というが、〔それに〕相応しているから、私が転輪王になることも確かであろう」と。

[139a1] そして転輪王は座より立ち、上衣を一方の肩にかけ、右膝の膝蓋骨を地に着け、天の輪宝を、両手で取り、左手に置き、右手を東方に向け、推して言う「輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし、ああ輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし」と。「全勝すべし」と言われ、天の輪宝はいにしえの転輪の道を行く。転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。



[139a6] 東方の藩王たちはまた、転輪王がやって来たことを聞き、聞きお  
わると、〔普段は〕転輪王を詣らないのだが、転輪王が来るので、貢ぎ  
物を運んで転輪王の元にやって来て、近づき、このように言う「王よ、  
善く来られた。王が来られたことは善きことです。この国土は王のもの  
であり、富み、豊かで、安穩で、豊穰で、多くの民衆を満たしております。  
ゆえに願わくば、これら〔諸国〕を王は善く統治されますように。  
我々は王の従者たらんと望んでおります」

[139b1] 転輪王はまた彼らに命じて言う「藩主たち、かくの如くあれ。私  
自身の国土と同様、法にかなう統治を行い、非法を行うことなかれ。こ  
の国土において非法を行い、背反する者には居住を許さない。かくの如  
くなせば、御身らは我が従者である」と。

[139b4] こうして天の輪宝は東方をよく平定し、東方の大海を涉って南方  
と西方と北方に行って平定して王宮に帰還し、重ねた座の上に、車軸を  
置いたかの如くにとどまる。

### 3-2-3. 銅の輪宝

[139b5] その中、転輪王のうち、銅の輪宝を生起する転輪王であり、以前  
の生存……広説乃至……自らもまた、十善業道を正しく堅持し続け、他  
人らに対してもまた、十善業道を正しく堅持せしめる。それもまた前  
〔に説いた〕と同様であり、王が布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を  
行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪  
宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によ  
って作られたのではなく、天が一切を銅をもって合成したものである。

一四〇

[139b8] クシャトリヤの灌頂王はそれを見て、このように思惟する「私が、  
昔の諸々の転輪〔王〕の話として聞いているところでは、クシャトリ  
ヤの灌頂王が、布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞

されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を銅をもって合成したものであり、彼は転輪王になる、というが、〔それに〕相応しているから、私が転輪王になることも確かであろう」と。

[140a4] そして転輪王は座より立ち、上衣を一方の肩にかけ、右膝の膝蓋骨を地に着け、天の輪宝を、両手で取り、左手に置き、右手を東方に向け、推して言う「輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし、ああ輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし」と。「全勝すべし」と言われ、天の輪宝はいにしえの転輪の道を行く。転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[140b1] 東方の藩王たちはまた、転輪王がやって来たことを聞き、聞きおわると、四つの軍隊、すなわち象隊と騎馬隊と戦車隊と歩兵隊とを武装して、転輪王と戦うために出陣し、転輪王と交戦し、詭計を破り(bhaṇḍana)、抗争し、闘うが、〔転輪王は〕武器を用いることなく彼ら藩王たちと交戦し、詭計を破り、抵抗し、争って打破し、その後、懲罰も与えず、首領を追放もせず、法にかなない、平等をもって正しく平定し、留まる。

[140b5] こうして天の輪宝は東方をよく平定し、東方の大海を涉って南方と西方と北方に行って平定して王宮に帰還し、重ねた座の上に、車軸を置いたかの如くにとどまる。

### 3-2-4. 鉄の輪宝

[140b6] その中、転輪王のうち、鉄の輪宝を生起する転輪王であり、以前の生存……広説乃至……自らもまた、十善業道を正しく堅持し続け、他

人らに対してもまた、十善業道を正しく堅持せしめる。それもまた前〔に説いた〕と同様であり、王が布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を鉄をもって合成したものである。

[141a2] クシャトリヤの灌頂王はそれを見て、このように思惟する「私が、昔の諸々の転輪〔王〕の話として聞いているところでは、クシャトリヤの灌頂王が、布薩時である十五日に沐浴し、斎戒を行じ、臣衆に圍繞されるとき、太陽の昇る東の方向から、千幅の天の輪宝が出現する。それは轂を伴い、車幅網を伴い、清浄潔白で、工匠によって作られたのではなく、天が一切を鉄をもって合成したものであり、彼は転輪王になる、というが、〔それに〕相応しているから、私が転輪王になることも確かであろう」と。

[141a6] そして転輪王は座より立ち、上衣を一方の肩にかけ、右膝の膝蓋骨を地に着け、天の輪宝を、両手で取り、左手に置き、右手を東方に向け、推して言う「輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし、ああ輪宝よ、古聖の転輪の道によって全勝すべし」と。「全勝すべし」と言われ、天の輪宝はいにしえの転輪の道を行く。転輪王もまた、四つの軍隊を率いてその天の輪宝の後を追って行き、天の輪宝が停まれば、転輪王は四つの軍隊を率いてその場に夜営を張る。

[141b2] 東方の藩王たちはまた、転輪王がやって来たことを聞き、聞きおわると、四つの軍隊、すなわち象隊と騎馬隊と戦車隊と歩兵隊とを武装して、転輪王と戦うために出陣し、転輪王と交戦し、詭計を破り、抗争し、闘う。〔転輪王は〕武器を用いるが、殺戮し合うことなく彼ら藩王たちと交戦し、詭計を破り、抗争し、闘って打破し、その後、懲罰も与えず、首領を追放もせず、法にかなない、平等をもって正しく平定し、

留まる。

[141b6] こうして天の輪宝は東方をよく平定し、東方の大海を涉って南方と西方と北方に行って平定して王宮に帰還し、重ねた座の上に、車軸を置いたかの如くにとどまる。

### 3-2-5. 輪宝のまとめ

[141b7] これについての法爾は以上の如くであり、それが〔経中に〕以下の如く述べられているのである「非人であり、黄金の輪〔宝〕を生ずる王は、戒を正しく堅持し、完全であり、障礙なく、その王は大いなる神通 (rddhi) をもってこの地上を統治し、あらゆる藩王は歓待してこのように言う ‘王よ、善く来られた。王が来られたことは善きことです。この国土は王のものであり、富み、豊かで、安穩で、豊穰で、多くの民衆を満たしております。ゆえに願わくば、これら〔諸国〕を王は善く統治されますように。我々は王の従者たらんと望んでおります、と。転輪王は彼らに命じて言う ‘藩主たち、かくの如くあれ。私自身の国土と同様、法にかなう統治を行い、非法を行うことなかれ。この国土において非法を行い、背反する者には居住を許さない。かくの如くなせば、御身らは我が従者である、と」

[142a5] 「非人であり、銀の輪〔宝〕を生ずる王は、戒を正しく堅持し、それより以前の卑俗はなく、王は大神変をもってこの地上を統治し、その時、藩王たちは歓迎するが、默然としてやって来てそこに近づくと、速やかに互いを見合って〔言う〕。‘王よ、善く来られた。王が来られたことは善きことです。この国土は貴方に所属します。王はここを統治し、我々は貴方の待者となりましょう。王は法を保ち、藩王たちは命令をしっかり守る。

[142a7] 「非人であり、銅の輪〔宝〕を生ずる王は、戒を正しく堅持し、前

の者と同様、卑俗なく、その王は大神変をもってこの地上を統治し、その時、あらゆる藩王たちは、闘うために立ち向かい、かれらと戦うが、〔王は〕武器を用いず、その後の懲罰もなく、法にかなひ、正しく統治する」

[141a8]「非人であり、鉄の輪〔宝〕を生ずる王は、戒を正しく堅持し、前の者と同様、卑俗なく、その王は大神変をもってこの地上を統治し、その時、あらゆる藩王たちは、闘うために立ち向かい、かれらと戦うが、〔王は〕誰に対しても殺戮をなさず、その後の懲罰もなく、〔法に〕かなひ、正しく統治する」

(『因施設』第2巻了、第2章は続く)